

# 令和2年度 徳島県小学校教育研究会 研究主題

徳島県小学校教育研究会  
事務局長 今川 仁史

## 1 研究主題

自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る  
日本人の育成を目指す小学校教育の推進

ー主体的・対話的で深い学びを通して  
生涯にわたって学び続ける力を身に付けた子供の育成ー

## 2 主題設定の理由

徳島県小学校教育研究会は、平成25年度から「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を研究主題として、新たな価値を創造し、これからの時代を切り拓く力と可能性をもった子供の育成を目指し、実践的な研究を積み重ね、各部会において様々な研究成果と実績を残してきた。

そのような中、新学習指導要領が告示され、その前文において、「これからの学校には、教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と示されている。そして、「これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。」としている。

本研究会では、これまで、子供たちの「学びの質」の向上を図っていくことに重点を置いてきた。特に、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、「何ができるようになるか」という学習する子供の視点に立ち、「何を学ぶか」という学習内容と「どのように学ぶか」という学びの過程を重視し、「主体的・対話的で深い学び」による「学びの質」の改善や、指導したことが子供たちに身に付いたかを把握し、その価値を意味付ける評価の具体化に取り組んできた。

これらのことから、これからの教育は、学校と社会が認識を共有化し、変化が激しく未来の予測が困難な時代に向かって、これまでの研究主題「新たな知を拓き」を生かし、価値観の違いや変化を前向きに受け止めながら、自らの力で未来を切り拓き、誰もが幸福と感じられる、ともに生きる豊かな社会を創り出すことのできる人間を育成する教育を実現しなければならないとの認識のもと、本年度より研究主題を「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」とする。さらに、変化が激しい未来において、その変化に対応するには、学び続けることが重要であると考え「主体的・対話的で深い学びを通して 生涯にわたって学び続ける力を身に付けた子供の育成」を副主題として設定した。

## 3 研究の視点

今年度は次の4つの視点に基づいて、研究に取り組んでいきたいと考える。

### (1) 「主体的・対話的で深い学び」の充実

主体的な学びについては、学ぶことに興味や関心をもち、見通しをもって粘り強く取り組むことができるようにするとともに、自らの学びを振り返る場の設定も大切である。特に学習の後に「以前より、よくわかるようになった」「自分が成長した」という自覚をもたせることが肝要である。授業を通して、自らの学習の成果を明らかにし、学習に対する意欲を高めていきたい。

対話的な学びについては、子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手がかりに考えること等を通じ、自らの考えを広げ深められているかという視点で指導のあり方を見直していく。その手立てとして、話し合い、ディベート、ワークショップ、発表会等、

多様な方法で他者と対話する場面を単元全体や授業の中に明確に位置付け、計画的、系統的、継続的に展開することで、自らの考えを広げ深めることをねらいたい。

深い学びとは、習得・活用・探究という学びの過程の中で各教科等の特質に応じた「見方や考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学びである。

これらは、学びの本質として重要な点を異なる側面からとらえたものである。単元や題材のまとまりの中で、子供たちの学びがこれらを満たすものになっているか、それぞれの内容と相互のバランスに配慮しながら、学びの状況を把握し、改善していくことが求められている。今後各部会においても、さらに実践的な研究を深めていただきたい。

## (2) 社会に開かれた教育課程を実現するためのカリキュラム・マネジメントの確立

新学習指導要領の前文に述べられているように、これからの教育においては、社会に開かれた教育課程の実現が重要である。そのためには各学校において、子供の実態や地域の実情を踏まえ、学校教育目標の実現に向けて、教育課程を編成するカリキュラム・マネジメントをいかに進めるかが鍵となる。特に学習の基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のためには、教科等横断的な学習を充実する必要があることや、「主体的・対話的で深い学び」の充実には単元などの授業のまとまりの中で、習得・活用・探究のバランスを工夫することが必要であるとされている。学校全体として教育内容や時間の適切な配分、必要な人的・物的体制の確保、実施状況に基づく改善などを通して、教育課程に基づく教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントを確立することが求められている。

各学校においては、保護者や地域の声に耳を傾けながら、学校のグランドデザインを教職員全体で考え、教育目標を含め、「生きる力」が求める豊かな人間性、健康・体力、確かな学力を全教職員が理解することが重要である。そして、具体化された資質・能力が実際の授業や教育活動の中で育成されたかをチェックし、その改善・充実の好循環が図られるようにする。こうして、全教職員で特色ある魅力的な教育課程を創り出していくことが期待される。

## (3) 一人一人に応じた指導と評価の改善

指導と評価は一体のものである。新学習指導要領において、各教科等の目標が資質・能力の3つの柱で再整理されたことを受け、観点別学習状況の評価も「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理された。このような評価ではテスト結果だけではない多面的・多角的な評価を行うことが必要となる。一人一人に応じた指導や評価をするためには、一人一人について十分な理解が必要である。多様な情報を生かしながら一人一人の理解に努め、それを授業の改善に役立てていきたいものである。

さらには、授業改善にとどまらず、子供が主体的に学び続けるためにも、教師による評価の情報を子供の指導に活用したい。子供が自ら学ぶためには自分がこれまでどのように学び、何を学んだかという振り返りが重要となる。その際、教師によるこれまでの評価の情報を子供に知らせることで、子供自身が今後のめあてや学び方を考える参考にすることができるようになる。教師には、その子供が自ら学び続けるために必要な力を見取り、評価することが必要となる。

## (4) 学び続ける教職員

我々教職員には、教職に対する強い情熱、教育専門職としての確かな力量、そして総合的な人間力等、実に多くの資質・能力が求められている。また、教育は時代の要請に応えるべく、その使命を担っている。目の前の子供への深い愛情を基盤に、絶えず学び続け自分を高めていくことができるような教職員でありたい。

特に働き方改革や教職員の世代交代による教育技術の伝承等は、喫緊の課題でもある。現在、各学校や各部会で行われている研究が、教師の力量形成や学校の改革等につながっているのかを改めて問い直し、そのあり方や方法も含め見直していくことは、学校現場からの大きな教育改革となる。

その意味でも本研究会が果たすべき役割は大きい。各部会がこれまで取り組んできた教育実践の蓄積や研究方法を継承しつつ、新しい時代に応じた研究を通して、教職員が互いに学び合い、学び続けることで、これまでの学校教育をさらに発展させることができる。互いの実践や意見を進んで研究会の場に出し合い、切磋琢磨することにより、優れた指導方法等を開発・共有していきたいものである。